

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	香西 史子
主な担当科目	英語研修,演劇の歴史と作品_A,演劇の歴史と作品_B,初級英語Ⅱ_A,初級英語Ⅱ_B,初級英語Ⅱ_C,初級英語Ⅱ_D,上級英語Ⅳ,中級英語Ⅱ_A,中級英語Ⅱ_C
2024年の教育目標・授業に臨む姿勢	・英語科目においては、正しい英語の理解とともに、正しい発音・発話指導にも大きく注力することにより、積極的に受講者が英語で自身の思いを発信する力を強化することを目指す。 ・「演劇の歴史と作品」においては、各回の内容を精査し、重点的に知識として知るべき要素に時間を割くこと、また、メディア授業でありながらも双方向のコミュニケーション確立を目指す。 ・「文学」においては、各回の内容を精査し、文学作品の付き合い方として新しい視点を与えられるように展開することを目指す。
2024年の教育に関する自己評価	・英語科目においては、国際英語発音指導士®として地道な発音指導が着実に実を結び、多くの学生が学年当初から自らの変化を実感したと報告している。 ・「演劇の歴史と作品」においては、学生の理解度が高まり、また、コミュニケーションのある程度の確立ができた。また、西洋演劇史の教科書『エッセンシャル・シアター』出版により、学生の理解を深めることができた。 ・「文学」においては、西洋文学の「解釈の方法」の新しい視点を示すことができた。
2024年のFD活動に関する自己評価	例年通り積極的に関わった。[語学分科会]2025年度からセメスター制が開始するにあたり、従来から変更となる点、従来通りの点を非常勤の先生方にもわかりやすくご理解いただくための時間を用意した。[異文化に関わるFD研修会] 異文化・多文化というテーマは大学において今後さらに重要度を増すことは確実であり、FD研修会という形で気付き・学びの場が提供されたことに感謝し積極的に参加した。
授業改善のために取り入れた研修内容	・具体的に取り入れた工夫ということではなく、心構えとして、1クラス内の受講者の理解度・理解力等の差があることを常に意識する。 ・異文化理解に関わるFDは外部講師を招いた講義であり、一般社会における視点を伺うことができた。日本中の教育機関において多様な文化背景を持つ学生が増加傾向を維持しており、今後もさらに教室内に複数の異文化が存在することを意識し、自ら学んでゆくべきと痛感した。

2024 年度(後期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード 0700 教員名:香西 史子

1)評価結果に対する所見

○『演劇の歴史と作品』

アンケートに記載はないが、対面で受講したかったという反応が一定数ある。この授業では出席報告フォームに「質問・感想欄」を設け、香西の回答を次の配信開始日に配信している。この方法は制作側としては極めて煩瑣で時間がかかるが、少なくとも受講者との交流ができるという点では非常に良い手段であり、受講生からも好評である。また、UNIPA の機能を使用して、学生が「視聴していない」部分がないよう配慮した。

○英語科目

発音指導への重点を強めることで、学生が実際に実力アップを体感できるようになった。英語への苦手意識は、発音を改善することからも克服できるという信念のもと、引き続き英語の「音」へのセンシティブリティを養う授業内容を進めていく。

○文学

出席状況について、学生自身が反省している部分がある。後半のオンディマンド部分について、対面授業と勝手が違い、「忘れてしまう」ことが発生しやすいと思われる。また、『演劇の歴史と作品』と同様、学生の質問や感想をピックアップして香西の回答を配信する方式も取り入れた結果、それを励みにしてくれる受講生が出てきてくれたことが非常に良かった。

2)要望への対応・改善方策

○『演劇の歴史と作品』

対面での試験を導入する。

○英語科目

難易度の見直しを行い、学生の「達成感」を導ける内容配分をある程度増やしていく必要がある。また、発音指導をより強化することで、英語を実際に身体的に使用することが学修効果を高めることを学生に実感してもらう。

○文学

オンディマンド方式での学修に慣れてもらう工夫を検討する。

3)今後の課題

○日本語力の問題

どの科目においても日本語運用能力に大きな差異が見られるようになっている。授業内での対応を検討することが必要であるが、さらに各授業の日本語難易度や含有率などを表示するといった事務的な対応も必要である。

以 上